

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25420678

研究課題名(和文) 欧米の工芸運動における日本建築の評価に関する研究

研究課題名(英文) Study on the Evaluation of Japanese Architecture in the Age of Western Arts and Crafts Movement

研究代表者

横手 義洋 (Yokote, Yoshihiro)

東京電機大学・未来科学部・教授

研究者番号：10345100

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：アーツ・アンド・クラフツ運動に与した欧米建築家による日本建築評価は、当初こそ素朴な好奇心に動機づけられていたが、次第にナショナリズムや近代国家にふさわしい様式探求の文脈によって強化された。アメリカ人建築家ラルフ・アダムス・クラムの著した『日本建築の印象』は、その典型的な作品である。とりわけ7-12世紀の寺社建築を評価する際には、木構造の持つ近代的な質が高く称賛され、「論理的で」、「偽りのない」表現という言葉が用いられた。こうした独特なイデオロギーの下、あるいは、建築の新たな様式探求の途上においては、日本建築の評価が有機的建築の理想とも関係づけられ、論じられることも確認できた。

研究成果の概要(英文)：The western architects' evaluation of Japanese architecture in the age of arts and crafts movement was first motivated by the curiosity in exoticism, but gradually promoted by the nationalism and the desire for modern style. Ralph Adams Cram's architectural book, "Impressions of Japanese Architecture", reflects this trend. His appreciation of 7-12 centuries Japanese temples and shrines, was characterized by using the word ("logical", "honest") in order to emphasize the modern quality of wooden construction. In this architectural ideology, or, in the seeking of American national and future style, the evaluation of Japanese architecture became even associated with the new organic architecture.

研究分野：建築史

キーワード：アーツ・アンド・クラフツ運動

### 1. 研究開始当初の背景

西洋建築の近代化、とりわけ 19 世紀末より、西洋列強の植民政策の進展とともに、アフリカ、中東、アジア、中米の建築文化が、新奇な建築様式として流通し注目される。日本の伝統建築も、当然こうした非西洋文化圏へのまなざしのなかに捉えられる。こうした主題に関する近年の研究業績として、海外の先行研究は大いに刺激となるものであるが、欧州地域内の文化交流に比重が置かれる点、考察事例数に限りがある点において進展の余地がある。とくに日本建築の解釈・評価に関しても誤解が散見され、国際的研究交流の一層の必要性を痛感させられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、19 世紀末より欧米の建築分野で発展する工芸運動（米国のアーツ・アンド・クラフツ運動を中核対象とするが、その影響源である欧州の動向を含む）のなかで、とりわけ日本建築に向けられたまなざしの分析から、建築情報の受容に際する解釈学的再考を試みるものである。一般に、この時代の建築は西洋文化圏における新奇の造形展開として説明されることが多いが、本研究では西洋世界が新たな造形上の刺激を日本の伝統建築に求めた点を重視する。そうしたまなざしが、どのような美学的根拠に基づき、実社会に対してどのように波及したのかを丁寧に追うことにより、折衷主義時代の解釈学的分析をめざしたいと考える。

### 3. 研究の方法

欧米の非西洋様式の摂取に関しては、ボストンを中心とするアメリカ東海岸における日本建築の流行をひとつの参照軸としたい。19 世紀末、ボストンは米国における日本趣味興隆の中核であり、その知的好奇心のあり方にはヨーロッパの建築ジャーナリズムに共通性をうかがうことができる。

対象とする時代は、西洋でジャポニスムが本格化する 1890 年代から、第一次世界大戦までとしたい。この時代に、米国ではアーツ・アンド・クラフツ協会機関誌において、新しい建築様式の創出とともに、異文化の建築様式に対する積極的関心が認められる。

また、1905 年に刊行されたラルフ・アダムス・クラム (Ralph Adams Cram, 1863 - 1942) の著書『Impressions of Japanese Architecture and the Allied Arts 日本建築・美術の印象』(以降、『印象 Impressions』と略記) は、米国人建築家が著した日本建築研究書としてはもっとも早い例であり、米国屈指のゴシック・リヴァイヴァリストに、日本文化への強い関心があったことを伝える重要史料である。本書のテキスト分析、さらに、その内容を同時代の他の文献を突き合わせることで理論の出自や影響関係までを詳細に明らかにしたいと考える。

### 4. 研究成果

(1) 米国で刊行された日本建築書として、米国東海岸に日本建築ブームを巻き起こしたモースの『日本人の住まい』(1885)があるが、これは基本的に民家の丹念な観察記述であった。また、英国人クリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser, 1834 - 1904) の『日本 建築・美術・工芸』(1882)は、興味深い建築への洞察を含んではいないものの、基本的に紀行文の体裁である。これに対し、ラルフ・アダムス・クラムの『印象 Impressions』には、北は日光東照宮から南は熊本城まで 56 点の写真が収録され、実際に言及しながら 7 世紀から 19 世紀末までの通史的展開が説明されている。

こうした通史記述のなかで第二章「初期の日本建築」に The pagoda of Yakushiji marks the birth of national Japanese Architecture という指摘があるが、ここに用いられた「国民的建築 national Architecture」という用語を理解するには、当時の米国建築界の事情を踏まえる必要がある。19 世紀末に英国より持ち込まれたアーツ・アンド・クラフツ運動は、米国において「民主的デザイン Democratic Design」という言葉のもと良質で大衆向けの製品の支持へ展開した。さらに、「民主的デザイン」という用語の多用には米国独自の国家主義的傾向があった。クラムは英国のラスキンのごとく高潔で純潔な信仰心と倫理観を重視し、その具現である純粋な表象物として中世聖堂を理想化し、その方法をもって将来の米国独自の建築のあり方を模索していた。そうした姿勢が日本建築への関心にも共通する。

したがって、クラムの日本建築観には、日本人が大陸の影響を受けながらも、国家共同体として、一民族として、どのように独自の建築を発展させるに至ったかについて高い関心が示された。クラムは法隆寺に対して「様式的にはまったく朝鮮あるいは中国的」と理解する一方で、薬師寺東塔に「国民的建築」の質を捉えた。クラムは、日本に影響を与えた朝鮮および中国建築を、「構造の簡潔さと率直さ、線の細やかさと調子、造形全体の風格、均斉の完璧さ、構成の厳粛さと荘重さにおいて、ほぼ完成された様式」として理解する一方で、薬師寺東塔には、その後の日本建築の展開を踏まえた上で、「中国建築の重苦しい厳格さに代わる、高貴さと変化に富んだ優美さ」を認めた。

薬師寺東塔に国民的建築の開始を認めただけからといって、クラムが法隆寺を評価しなかったわけではない。クラムは法隆寺に対し、構造を直に露わにする表現を捉え、「すべてが完全に構造に由来し、そこに見られる装飾はただ構造的な細部となっている。柱には微妙なエンタシスがあり、柱間も絶妙。組物は簡潔にして構造を示している」と述べた。

こうした構造を率直に示す表現は大陸の影響の名残として捉えられ、続く薬師寺東塔

では、「朝鮮建築の厳格で古典的な形状に代わって、ヨーロッパ中世建築に見出させるような軽さへの意志、人の心に訴えかけるような優美さ」が芽生えたと記し、最終的に、宇治の平等院鳳凰堂に「この上ない優美さと威厳」を認めるとともに、「均斉および構成美において日本建築の頂点」という評価を下す。

法隆寺、薬師寺、平等院鳳凰堂の三作に、大陸からの影響 国家的建築の誕生 日本建築の頂点といった、7世紀以降500年の日本建築の展開過程には、国民的建築見極めの意図がうかがえる。

ただ同時に、クラムの建築史観を理解する上で、親交のあった日本人の影響も無視することはできない。岡倉天心の1890-92年の講義録とされる『日本美術史』を参照すると、「藤原時代においてわが美術が優美の極点に達せしは、わが美術の独立を示せり」というクラムの建築観に共通する見解をうかがうことができる。美術と建築という領域の違いはあるが、両者は藤原時代の評価、優美さの強調において主張が共通している。岡倉の日本美術史にナショナリズムが反映されている事実は先行研究が伝えるとおりだが、芸術が国別の発展史として捉えられる点でも、クラムと岡倉の立場には共通点がある。

(2) クラムが法隆寺に向けた評価、構造を率直に表現した細部や装飾への賛辞は、クラムが理想としていたゴシック建築評価に近い。ここでクラムの『印象 Impressions』の原文、建築への評価を精査すると、「論理的 logical」という用語は次の三箇所を確認される。

A:「日本建築は世界屈指の様式に思われる。ギリシャ建築、中世建築、初期ルネサンス建築を不朽ならしめた質において見劣りするところがない。そうした質は、日本建築も含めて、さまざまに異なるものだが、それがあるからこそ発展過程において、建築はつねに論理的で、民族的で、完全でいられる。」

B:「他の建築様式と同様、それ[日本建築]も諸条件のうちに成立した一貫して論理的な発展の産物であるから、西洋の様式へ投じられるのと同じ敬意と研究関心が注がれ投じられるべきである。」

C:「私はその国民的建築が、まさしく論理的で、長い間続く芸術の法則にしっかりと根ざし、世界の他の様式に劣らないものであることを確信する。それはゴシックが石造における完成された様式と言われるのと同様、木造における完成された様式である。」

上記はいずれも、日本建築が西洋建築と同等の文化的芸術的価値を持つという信念において一貫している。Aについては、「論理的 logical」と並列された「民族的 ethnic」という用語に、国民的建築、ナショナリズムの視線を見出すことができるのに対し、「論理的 logical」、「完全な perfect」という用語は、より直接的に日本建築の形態的・構造的

な特徴に与えられた評価である。

クラムは西洋の石造建築に比肩するまったく別種の存在として日本建築を評価し、前近代まで持続する木造建築の伝統に対して「論理的」、「完全な」と評した。BとCについても日本の木造建築が世界レベルの評価を得るべきという主張であるが、以上に引用した『印象 Impressions』の原文に「論理的 logical」という用語と関連して、ゴシック建築評価に用いられる「正直な honest 表現」、あるいは批判されるべき「見せかけの構造 false construction」といった言葉は確認できない。だが、クラムの近世建築の評価を見ると、まさしくそうした中世主義者による批判が展開された。そして、「構造に由来する装飾 constructional ornament」、「構造的な弁明 structural excuse」といった言葉が、ゴシック建築評価との共通点と言える。近世建築に対するクラムの批判は、日本建築本来の質、すなわち、木構造ゆかりの表現がないがしろにされ、主要な関心が構造とは無縁の装飾に向けられていることに対する不満にほかならない。クラムにとって、構造に由来する表現こそが論理的で純粋な建築と言えるのであって、過剰な装飾は建築的な成果とは認められなかった。

近世前の対象、すなわち、古代・中世の日本建築に関して言えば、フェノロサおよび岡倉天心による1884年の古建築調査、その成果を受けた岡倉の知見がクラムの知見に大きく反映したことは、先述した藤原時代へ至る日本美術評価の一致に見てとることができた。日光東照宮に対しても、クラムと岡倉の評価は一致する。同時代、明治20年代前半に岡倉が「錯雑華美に失し、全体として完美のものとするべからず」といった評価を下し、装飾過多にクラムと同様の批判を向けたこと、さらに明治30年代になると建築の専門家の立場で塚本靖をはじめ、伊東忠太らが東照宮批判を展開するようになった経緯は先行研究が伝えるとおりである。クラムの東照宮批判は外国人としてかなり早いものと評価できる。

(3) クラムの日本建築観が米国人建築家たちに与えた影響はどのようなものであったのか。以下には、アーツ・アンド・クラフツ運動下の建築界にどのような反響をもたらしたのかを述べる。

まず注目すべきは、アメリカ住宅の現状を踏まえ、日本建築にその範を求めようとする主張である。そのなかでクラムは、日本人の木材に対する研ぎ澄まされた感覚が独自の美学へと発展したことを強調した。すなわち、表層ではなく本質、放蕩ではなく簡素、ピューリタニズムにも通じる表現上の強い倫理観がクラムの建築観を形づくったのであり、その建築的主張の一端はあらためて米国で進展しつつあったアーツ・アンド・クラフツ運動との連動として理解

することができる。

ウィリアム・モリスによって開始された英国のアーツ・アンド・クラフツ運動は、19世紀末に米国東海岸に飛び火し、1897年6月、ボストンにアーツ・アンド・クラフツ協会を誕生させた。むろんクラムも会員であった。創設者の一人、グスタヴ・スティックリー (Gustav Stickley, 1858 - 1942) は1901年10月より、協会に関係したもっとも影響力のある雑誌『The Craftsman』を創刊し、以降の編集を取り仕切った。そこに日本建築に関する記事が散見される。

1906年5月号には、「日本建築と将来の米国様式の関係」という匿名の論考が載せられた。論の大半はクラムの書の抜粋からなり、クラムの業績を高く評し、その価値判断を反復した内容だ。タイトルにうかがえるとおり、記事の意図は、クラムの書の内容が米国建築界の将来を占うのに重要である、というイデオロギーの先鋭化にあった。論者の意味づけに従えば、日本建築にうかがえる特徴は、ヨーロッパ(英・仏・独)で支持されつつある新しい建築志向、すなわち、正直さ honesty、簡素さ simplicity への回帰、虚飾の拒否といった傾向に一致するという。

また同号の新刊紹介欄には、クラムの『印象 Impressions』がフェノロサや岡倉をはじめ、ラッセル・スタージス (Russell Sturgis, 1836 - 1909) 71)、ウィリアム・エリオット・グリフィス (William Elliot Griffis, 1843 - 1928) に賞賛されたこと、さらに、『印象 Impressions』の内容が『The Craftsman』誌の掲げる建築的理想に非常に近いことを繰り返している。まさにこの理由によって、「日本建築と将来の米国様式の関係」のなかでクラムの『印象 Impressions』は長々と抜粋引用されたのであった。

もう少し具体的なトピックに触れたものとして、1909年5月号には、「東洋の技巧精神」という論考が出され、木材を正しく評価することの重要性が日本建築を模範として強調されている。ここに引用された「著名な作家」について、論者は名前をあきらかにしていないが、『印象 Impressions』を精査した結果、それがクラムであることが特定できた。上に引用した一節は一言一句違わず、『印象 Impressions』の第6章と照合することができる。論者は建築家ではなく家具デザイナーであるが、クラムの見解を踏まえて、これまで自分たちが商業的観点で欠陥品・価値のない商品と捉えてきた木材に自然美を再発見し、それをないがしろにしてきた米国建築界に反省を促したのである。『The Craftsman』誌では、時間の経過とともに、日本建築への関心がますます高まり、なかには米国建築の将来を占うひとつの模範的存在として紹介するような強い

論調も認められた。1907年7月号には、ヘンリエッタ・キースによる「米国近代住宅への日本の影響の跡」という論考が、当時気鋭の建築家として知られたグリーン・アンド・グリーンによるカリフォルニアの住宅群を日本建築の影響下に論じており、とりわけ『印象 Impressions』との関連で言えば、住宅と周辺の自然環境との調和の重要性が強調されている。1909年4月号には、『The Craftsman』の編集者スティックリー自身が「国家の特性を真に表現する恒久なる建築の価値」と題した小論を寄稿している。

また、『The Craftsman』誌の論考「日本建築と将来の米国様式の関係」にも、クラムの民家評価を受けて、「美と実用を兼ね備えた簡素な住宅に国家の精神が表れていること、同様の理想を掲げおぼろげに国家の精神を模索すること」の突き合わせを説いている。これは、すなわち、長年求められている米国の国家様式のヒントが日本建築にうかがえる、という主張にほかならない。また、1911年11月号の「クラフツマン・ファームズの新しいログハウス」という論考でも、木材を露わに表現するログハウスの可能性を示すなかで、クラムの『印象 Impressions』に言及し、日本の民家が材の美しさを見せるために、木をありのままに仕上げることを紹介している。クラムの日本建築観は、米国の国家様式の模索という文脈の中で高く評価されるようになった。実際、国家様式の模索は、20世紀初頭においても米国建築界における大きな課題のひとつであった。その要件について、スティックリーはサリヴァンの言葉「我々のあるがごとく建物はある」を引用しながら、日本建築にうかがえる飾り気のなさ、率直で正直な表現の有効性を説いた。

(4) クラムの著書のひとつに『Six Lectures on Architecture 建築の六つの教え』がある。この著作は他の作家、とくにブラグドンとの共作という点が重要である。全6章からなる本書は、ゴシック建築に関する1、2章をクラムが、近代建築およびデザイン原理に関する3、4章をトマス・ヘースティングス (Thomas Hastings, 1860 - 1929) が、有機的建築および形態論に関する5、6章をブラグドンが担当している。

『印象 Impressions』以降、クラムは日本建築に関する論考を発表することはなかった。この『Six Lectures』でも、米国におけるゴシック主義者の立場にふさわしく、ヨーロッパ中世建築の魅力を説くのであり、そこに日本建築への言及は一切ない。ただ、興味深いことに、「有機的建築」に関心を寄せていた事実を確認することができる。

機能に準じた形態が美しいとする考えは、サリヴァンの影響とも考えられるが、クラムの中で確実に捉えられていたのは、自身が長年実務として進めてきたゴシック・リヴァイヴァルと、新しい建築として注目を集めつつ

あった有機的建築が同じ理想として重なることであった。クラムの建築論は、敬虔な高教会主義者らしく伝統的ゴシック建築へと向かい、ゴシック大聖堂に有機的建築としての価値を認めるものである。ただ、アーツ・アンド・クラフツ運動下にいたサリヴァンは植物模様に着想を得た装飾を試みており、その弟子たるプレーリー・スクールの建築家たちも住宅を周辺環境に応じて設計することに関心を持っていたわけだから、もともとクラムの中世主義や日本建築への関心は、有機的建築思想に近い関係にあったとも言えよう。

文献記述に残る証拠として、クラム、有機的建築、日本建築、この三者をつないだのは、『Six Lectures』の共著者ブラグドンであった。ブラグドンが担当した有機的建築の章には、クラム、日本建築への興味深い言及を見つけることができる。ブラグドンは、クラムが『印象 Impressions』で日本建築を「論理的」な発展と見なしたことを踏まえ、その偉大な建築に「有機的」建築の価値を上乘せした。ブラグドンはクラムとは異なり、サリヴァンやライトと縁が深く、米国では有機的建築の理論家として名が通っている。

1920年代の米国は、ヨーロッパのバウハウスに対抗し、有機的形態に国家的表現を求める傾向があった。米国建築界の新風が、世紀転換期のアーツ・アンド・クラフツ運動から1910年代以降に有機的建築へ収斂しつつあったことは、当然、日本建築の意味づけにも少なからず影響を及ぼした。ブラグドンが日本建築に認めた有機的特徴は、かつてクラムが認めた構造を率直に表す表現美、木材の自然美への崇敬、建築と周辺環境の調和に理論的にはつながっているのかもしれないが、もはや日本建築の伝統そのものへの敬意はなかった。こうして米国建築家にとっての実行的意味合いにおいて、クラムの『印象 Impressions』に付与されたイデオロギー的価値も次第にその影響力を薄め、純粹に伝統的な日本建築を知るための情報の書として読まれてゆくようになるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

横手義洋、米国アーツ・アンド・クラフツ運動下におけるラルフ・アダムス・クラムの日本建築観とその受容に関する研究、日本建築学会計画系論文集、査読有、687号、2013、pp.1197 - 1205

〔学会発表〕(計 1件)

横手義洋、The “Ichiku” of the Nippon Kangyo Bank Building、The 14<sup>th</sup> International Conference of the EAJS、2014

〔図書〕(計 1件)

磯崎新、横手義洋、太田出版、日本近代建築思想史、2015、360

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

横手 義洋 (YOKOTE, Yoshihiro)

東京電機大学・未来科学部・教授

研究者番号：10345100